

書 評  
REVIEWS



Amberly MALKOVICH,  
*Charles Dickens and the Victorian Child:  
Romanticizing and Socializing the Imperfect Child*  
(176 頁, New York: Routledge, 2012 年 12 月)  
ISBN: 9780415899086

(評) 松本靖彦  
Yasuhiko MATSUMOTO

Children's Literature and Culture シリーズのひとつとして刊行された本書で著者は、the imperfect child という独自の概念を軸に、ディケンズやヴィクトリア朝作家の作品だけでなく、J. K. Rowling の『ハリー・ポッター』シリーズも含めた、児童向け (とされることの多い) 文学作品に登場する子どもの人物について考察している。

まず、著者が提示している最も重要な論点と思われるものに沿って、本書の概要を提示したい。

ヴィクトリア朝文学の子どもといえば、牧歌的で感傷を誘う子ども像や、the Romantic child と呼ばれる、純粹で完全な子ども像が良く知られているが、研究者や批評家たちは重要な the imperfect child の存在を見逃してきた、と著者は序章で指摘する。ディケンズ作品における主要な子どもの人物の多くは the imperfect child の骨組みをしていると主張する著者は、the imperfect child はヴィクトリア朝後も文学における子ども像のひとつの標準的な型として存在し続けているのだと論じる。そして、オリヴァーとネルを例に、中産階級からみて他者でしかない貧しい子どもたちが、彼 (女) らが嘗める辛酸のゆえに romanticize され eroticize された結果、彼 (女) らの格上である読者層の階級に回収されていく、という the imperfect child の 1 つの変身パターンが提示される。(これは次章以降繰り返し言及される the imperfect child が「異世界」での学びのプロセスを経て成長を遂げるというパターンと表裏一体になっているものと思われる。)

オリヴァーが「もっと欲しいんです」と訴えたように、ヴィクトリア朝におい

でも現代においても読者たちは the imperfect child の物語を求めてやまないと述べる著者は、第1章で大部分はディケンズ作品から例をひきつつ、(ロマン派の「純粹」で「完璧」なゆえに現実離れた子ども像とは違い) 過酷な現実の只中での経験から学び成長していく、という the imperfect child の重要な特徴について論じる。それぞれの文化的背景の中で機能することができるようになるために the imperfect child にとって学びのプロセス——学校教育であれ、自然や現実の試練から学ぶのであれ——は不可欠なのだ、と著者は言う。

そもそもなぜディケンズが the imperfect child の考察に重要な作家なのかというと、彼こそはそのリアルな子ども像によって the imperfect child を発展させた立役者だからである。ディケンズ作品が論じられた後は、著者によればいずれも the imperfect child の物語だという Charles Kingsley の *Water-Babies* と Hesba Stretton の *Jessica's First Prayer* が考察の対象に取り上げられている。

第2章で著者は、おとぎ話やファンタジー物語の要素と the imperfect child との関係について論じる。ごく簡単にまとめてしまえば、the imperfect child は the fairy realm という異世界での学びを経ることを通じて人物として成長する、というのが本章で最も重要な論点である。現実とは異なる the fairy realm との遭遇がなぜ重要かという、それが the imperfect child に「自分の人生は変わり得るのだ」という希望を抱き続かせるからなのだという。

第3章で考察されるのは、自らが置かれた社会や文化の中で異質な者(さらに取るに足りないもの)として扱われていることを言語(自分に与えられた名前や綽名)を通して認識した the imperfect child たちが、どのようにして自分たちの居場所を見出していくのかという問題である。その一方で、彼(女)たちの言葉遣いがどのように彼(女)たちの置かれた境遇を表現しているか、というような問題にも考察が加えられている。(たとえば、救貧院で生まれた孤児のオリヴァーが物心ついたときから中産階級の英語を話すのは、彼本来の血筋の良さを示唆するためなのだ、というような。)

病や死が the imperfect child の造型にしばしば用いられることの多様な意味について考察するのが、第4章の主眼である。いくらかでも調和のとれた状態(それは自らの死を意味する場合もある)に到達するために the imperfect child は病や死に直面しなければならないことが指摘される。言い換えれば、病や死は the imperfect child の象徴的な再生の契機となるのである。

第5章で著者は、the imperfect child の現代版にあたる the contemporary child という概念も新たに提示しつつ、特に現代児童文学作家の範疇に入れられることの多い作家による the imperfect child の造形を考察する。J. K. Rowling の他、L. M. Boston, Joan Aiken, Lemony Snicket, Philip Ardagh の作品が扱われている。

そして終章で、著者は既に提示された主な論点を確認し、ロマン派的な理想そのものの「完全無欠な」子ども像としての造形ではなく、より現実に即した the imperfect child という子ども像の有効性を改めて強調し、この概念を軸にした文学教育の可能性について語る。

「チャールズ・ディケンズとヴィクトリア朝の子ども」という表題から、評者は「ディケンズと(の)子ども(像)」、「ヴィクトリア朝(社会・文化)における子どもの表象」というような主題に関する新しい知見や洞察に触れることができるのではないかと想像しつつ本書を繙いてみたが、残念ながらかなり期待外れだったと言わざるを得ない。

以下にいくつか本書の問題点と思われるものを指摘したい。

まず、本書の中核を成す the imperfect child という概念は、残念ながら十分な説得力をもつ有効な概念になり得ていない。著者は the imperfect child の定義を第1章で提示することを序章で予告しているが(2-3)、本書を通じてこの概念が明確に定義されているとは思えない。そもそも否定接頭辞が付された概念をただただ肯定的に定義することは難しいといえよう。

加えて、著者が imperfect という語をほとんど realistic の意味で用いているように思える文脈がある一方で、「The imperfect child は imperfect な状態に到達するために……ファンタジーと現実とが入り混じった世界を経由しなくてはならない」(86) とか「(the imperfect child の) 完全性はその複雑で魅力的な不完全性(imperfection)の内に見出される」(140) というように、その場その場で好き勝手な含みをもたせて用いていることも the imperfect child という概念が学術的考察において果たして全うに機能し得るのかどうか疑問に思わせる要因である。

結局のところ、著者による例示を参照することで割り出されてくる the imperfect child の意味は、「どこまでも理想を表象した the Romantic child ではなく、現実社会に存在する問題から学び、自ら選択をして成長していく子ども(像)」というようなところだろう。

この概念自体に異議を申し立ててしまうと元も子もないのだが、「完全無欠(perfect)」でないものはすべて imperfect な範疇に仕分けされるしかないわけなので、the imperfect child などという言葉は意味が広すぎる。それをよいことにして著者は、論じる対象の人物を——オリヴァーにしろネルにしろ——すべて安易に the imperfect child だと断定してしまっている。先行研究とは違う枠組みでディケンズ以降の文学にみられる子ども像を論じてやろうという意図は分かるが、無理が生じているのは否めない。

たとえば、オリヴァーにはロマン派の子どもの要素があっても構わないと思う

のだが、オリヴァーをあくまで——the Romantic child ではなく——the imperfect child として論じ切りたい著者は、彼がフェイギンから渡された犯罪者物語を読む件を指して、「オリヴァーの無垢が殺人などの社会問題によって汚されたことを示唆している。オリヴァーはまさに現実そのものの経験を突きつけられたのだ」と論じている(43)。犯罪について読書しただけで——しかもオリヴァーは非道な殺人の描写に恐れおののいた挙句、本を投げ出してしまい、神に祈りを捧げているというのに——果たして彼の無垢が汚されたことになるのか甚だ疑問である。

どうやら本書の主旨は、ディケンズ以降の英文学にみられる主要な子ども像は、the Romantic child ではなくて the imperfect child として捉えられるべきなのだ、ということに尽きるようである。実際のところは、先行研究が教えてくれるように、ディケンズは the Romantic child の伝統を受け継ぎながらも、より realistic な彼独自の子ども像を生み出した、と (the imperfect child という曖昧な概念抜きで) 捉えるのがより妥当な理解であろう。

個々の人物や作品に関する著者の考察は、細かい点においては興味深い指摘がないわけではない。しかし、全般的には今までディケンズ作品に関して既に指摘されてきた論点が、特に深く掘り下げられることもなく the imperfect child に (時には強引に) 絡めて並べられているだけで、非常に物足りなく感じる。

たとえば、第2章でネルに関する考察を読み進めると次のような記述でパラグラフが結ばれている箇所に行きつく。「ネルは“現実の”世界と“おとぎ話の”世界の両方に存在しているのである。……“おとぎ話の”世界はネルが祖父と共にロンドンを脱出することを可能にさせ、また彼女がロンドンの街には見いだせない希望というものを彼女にもたらしてくれるのである」(44-45)。第2章でのネルに関する考察はこれで終わりである。次のパラグラフでは著者は既に『クリスマス・キャロル』のティム坊やの考察に移っている。これには愕然とした。もうちょっといくらかひねりや深みのある読みが提示されないことには£70以上払って本書のプリント版を入手した読者としては浮かばれない。本書の中核を成すディケンズの子ども像の考察は総じてこの調子で、分析や洞察どころか論証めいた議論の展開すらない。本書の the imperfect child という観点を通して、ディケンズの子ども像に関して重要な新しい知見がもたらされたとは思えない。

本書で扱われているディケンズ作品の選択にも疑問がある。ディケンズの主要作品中、著者が考察の対象とするのは『オリヴァー・トゥイスト』、『骨董屋』、『クリスマス・キャロル』、『ドンビー父子』、『荒涼館』、『リトル・ドリット』のみである。ディケンズ文学の一側面に光を当てるのであれば、必ずしも全主要作品を網羅していなくても構わないと思う。しかし、子どもという主題について

の考察でありながら、なぜディケンズの代表的かつ重要な子ども像が提示されていると思われる『デイヴィッド・コパフィールド』と『大いなる遺産』への言及さえないのか。また、なぜおとぎ話的要素もあり、子どものキャラクターも出て来る『互いの友』は全く扱われないのか。評者の記憶する限り、作品の選択に関しての十分な説明はなく、恣意的な印象を受ける。

他にも不満はある。本書には論点の掘り下げが足りないことについては既に述べたが、著者がそれを自覚して埋め合わせようとしているかのように不必要な引用が多い。豊富な引用に基づいて提示される時代背景についての説明や先行研究の知見の中には、議論に有効に噛み合っているとは思えないもの——たとえば、第4章の「死を扱う新手のビジネス」に関する箇所(100)——や引用自体が目的ではないかとさえ思えるもの——たとえば、100頁のGallagherとGreenblattの共著*Practicing New Historicism*からの引用——が散見する。

加えて、数カ所の誤植だけでなく、「主語がないのでは?」「文法的に乱れているのでは?」と思われる文や「大学院生の論文ではないか」と思わせるような生硬な表現もあり、小さい本の割には粗が目についた。

以上、不満ばかり書き連ねた格好になってしまったが、結論として本書はディケンズ諸氏がどうしても読まなければならない本ではない、と言わざるを得ない。それでも、読む側の関心次第では、ディケンズ作品や小説全般について考える上で断片的なヒントを与えてくれる本ではある。たとえば、第5章で著者はthe imperfect childとthe contemporary childの主な相違点を3つ挙げているが、それらはヴィクトリア朝社会と現代社会の相違、またヴィクトリア朝人と現代人の世界観の相違などを考察する上で示唆に富む指摘だと思われた。そのような指摘を手掛かりにして、たとえばPeter Coveneyの*The Image of Childhood*のような研究を皆でアップデートし続けることができれば、「現在」に至るまでの子ども像の変遷から見えてくるものがあるに違いないと思う。